

<b>Title</b>	森内俊雄と地獄の思想(下)
<b>Author(s)</b>	西谷, 博之
<b>Citation</b>	聖学院大学論叢, 13(2): 232-225
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=500">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=500</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

森内俊雄と地獄の思想 - (下) -

思想 2

現実の〈天国〉や〈地獄〉は現実が解決してくれる。つまり、当人の意識次第によって〈天国〉があり、〈地獄〉があるのは当然である。たとえ、解決できなくてもいつか誰かによって解決できると夢を懐くことができるが、死後の〈天国〉や〈地獄〉は現実問題としてどうにも解決のしようがない。もっとも現実問題として〈天国〉意識を解決するとはどういうことか、これは各個人の問題であろう。

森内の「灰の日」はそういう意味で森内自身にとっても、極めて貴重な作品となり得ている。一九六九年「幼き者は驢馬に乗って」でデビューした森内は十二年後の一九八一年『すばる』六月号に「灰の日」を発表した。この小説は、昔、関係のあった女が死に今日葬儀があるというので出かけたが、新興住宅街には彼女の葬儀はなく、彼女の住居と覚しき所には、他人が入っていたという話である。その中で彼は言う。

強いて言うならば、在るのは空虚だった。私は空虚に見つめられている。注視をされている感覚には威力があつて、それを錯覚とは言い難かった。空虚にみつめられて、今朝の私が〈私〉に成つて行く思いがするのは不思議なことである。

西谷博之

結局彼女の葬儀は無かったので私は〈私〉になり損うのであるが、森内はデビュー後初めて〈虚無〉を一つの型にして見せたといつて良いのではなからうか。今私は「灰の日」は森内作品の中にあつて〈虚無〉が形をとつた最初の作品であると書いたが、この〈虚無〉は最初期の作品にも現われている。作者自身の〈虚無〉に対する考え方が違うだけであると思うのだ。同じ「幼き者は驢馬に乗って」の中に次のような描写がある。

指先から乳白色の滴が虚無に落ち、私が生れた。虚無は暖かでは  
私は闇を恐れなかった。

ここでは森内は〈虚無〉などどうにでもなると思っていたのではな  
いか。少なくとも〈虚無〉に刃向かう力が自分にはあると思ってい  
たふしがある。しかし、これは私に云わせれば森内自身の若さがそうさ  
せたというより、森内自身総身にエネルギーが溢れ〈虚無〉でさえも  
暖かく感じたのであろう。

森内俊雄と〈地獄〉の思想―上―において、森内の前半期を代表と  
する長篇として『骨の火』をあげたが、彼にはこの他後期作品として  
三本の長篇がある。『文芸』一九八九年春季号から一九九〇年夏季号発  
表、一九九〇年九月河出書房新社出版の『氷河が来るまでに』、『文芸』  
一九九二年冬季号から一九九四年夏季号発表、一九九四年七月河出書  
房新社出版『谷川の水を求めて』、『群像』一九九五年六月号から一九  
九六年十一月号発表、一九九七年五月講談社出版『晒し井』である。  
これら三本の長篇小説と森内俊雄の地獄の思想との関係を見て行きな  
い。

『氷河が来るまでに』は読売文学賞、芸術選奨文部大臣賞を受けた作  
品であるが、妻ミータン、長男バク（大学を出て六年経つ会社員）、高  
校三年の次男ミシヨウ、中学二年の長女ノエ、そして一家の主ダダの  
物語である。森内に言わせれば、「ダダと呼ばれる『壊れかけた器』の  
魂の消長を写そうとした」ということになる。

ダダは薬物中毒者であり、敬虔なカトリック信者である。カトリッ  
ク信者なのに薬物中毒者とは矛盾しているようだが彼の場合決して矛  
盾していない。彼の場合、カトリック信者なる故に薬物中毒者になっ

たと云えようか。中学生のとき父と母の会話を偶然聞いて、日頃敬愛  
している父が「この子には、向かない。先があるものか」と云うのを  
聴き傷つく。直接には「先」は養子の受け入れ先の意であるが、ダダ  
の人生はロクな終わり方をせず「先があるものか」ということになる。  
ダダに云わせると〈先〉はあったことはあったのだ。しかし、父の言  
を受け取ったような意味ではない。「(生)はダダを養ってきはした。」し  
かし、「生きていく上でこの世の良い養子にはなれなかった。」という  
思いが強い。これは聖書に背くことになる。彼の職業は小説家のように  
である。そして「信仰の根本は祈りに尽きる」と書き、想像上の人物  
根来正美と奈良坂和希の〈愛〉について書こうとしていたところ筆  
が止まったのである。つまり、彼にとつては信仰は〈祈り〉であるが、  
どうしても〈愛〉と一致しないのだ。つまり宗教キリスト教は〈信  
仰〉、〈希望〉、〈愛〉からなるのだが、信仰と愛が一致しないのである。  
何故、ダダは薬物中毒になったか。「二十年もの昔から」不眠症を恐  
れたというのは、バクが三歳のとき事情があり、妻が子を連れて実家  
に帰りそれから無言電話が始まったのである。ダダにとつてその無言  
電話が無性に恐ろしく、眠るために酒浸りの状態になった。しかし、  
まだこのときは幻覚症状は現われなかった。六年前から、精神科医に  
通い出してからは中枢神経興奮剤や抗鬱剤を乱用してきた。最初は仕  
事のためであったが、「眼醒めを求めて、医師から処方してもらい、  
それは三日に一錠の割であったが、常用する内、量がたちまち増えた  
のである。夢の中で、ひよつとこ面の僧侶が現われる。「面の下は空虚

であると思えた。暗黒がある。吸い込まれそうだと。争つてみたが、罪責感の強さに敗けた。」この表現は最初の方に引用した森内の闇に対する描写とはまるで違う。また夢の中でダダは次のように思う。

存在の不安、という言葉をもこのとき感知した。そうしてみると、ダダの鬱病の根は深く、後年、悪用した薬のせいとはかりは言えないのかも知れない。(傍点西合)

私は森内の地獄の在り方を「森内俊雄と地獄の思想」―上の冒頭で示したが、ここへ来て彼の考え方が変わってきたことに気付くのである。そして次のように聖書を引用するとき彼の考えが決定的に初期と違ってきたことが分るのだ。

わたしたちは今もなお、皆ともにうめき、ともに産みの苦しみを味わっていることを知っています。眼に見える望みは望みではありません。眼に見えるものを誰が望むでしょうか。わたしたちは眼には見えないものを望んでいるので辛抱強く待っているのです。「ロマ書」第八章二十二節及び二十四節。

無言電話の恐れから薬物中毒になったダダ。それが真実だとするとノエが田舎のジッタ、バツタに手紙を出した様に、ダダが施設に入り薬を断れば自然に薬中毒は直るという主治医の判断だが、家族の中で

もミシヨウのように「それが出来るのなら世話ないよ、むつかしいんじゃない？」という意見もある。私は鬱病が別な所からくるものであれば、薬はやめられたとしても鬱病が最後に残り、結局また薬の世話にならざるを得ないと思うのである。ここまできると森内文学の（地獄）は「目に見えるもの」に期待するのではなく、「目に見えぬもの」に希望をつなぐのがより正しいと分ってくる筈である。

そして妻ミータンとダダが若い頃訪れたアイルランドの記憶は驚くほど鮮明に甦る。父が狂ったと言いながらも、汚物の処理をし父の介抱をしたミシヨウは、ダダの記憶を「中学生以後、習得した知識、経験はほとんど失われた」と判断したのであるが……。アイルランドの詩人イエーツの詩を思い出すダダの姿には記憶喪失で苦しむ人の暗さは見られない。そのダダが自分の薬物中毒についての今後の治療法について尋ねる。医師は立所にダダが「無益に思い悩んだに過ぎない」ことがらに単純明快な答えを出してくれた。断薬の試みなど始めから放棄し「薬を上手に」今後二、三十年を付きあうようにと。上手くすると、ダダは二、三十年生きられるというのだ。

ミータンと結婚した頃、ジッタ、バツタの町にはまだ信号が無かった。この町はアイルランド・キルケニーを思わせるものがあった。キルケニーでは牛たちが、陽光の中で彼等自身、勿論ミータンもダダも知らぬものを待つ時間の流れがあった。それが大都会での何十年かの人生の中ですっかり失われたように見える。しかし私に言わせれば、失われたように見えるだけであって、優しい妻やいざとなると集まる

家族はかけがえない神の贈り物である。たった二週間ではあるが妻の実家に帰ったダダは若い頃を思い出し、新しい人づきあいを始めるであろう。「何もかも失っても己れは残る」のであるから。「氷河は来るまでに」は結局何が言いたいのか。「主人公」は十分に苦しんだかということであろう。十分苦しんだ者だけが天国への狭き門を通過することを許されるのではないか。

『谷川の水を求めて』は森内の野心作のつもりであった。「つもりであった」などと書いたのは、それが成功していないと思うからである。祈ることの出来ない主人公、臼井基典に蟻が這う音のかすかな囁く声がある。「もう充分である。さあ立って行きなさい。すみやかにその好むところへおもむき、欲するところをなせ。わたしはこの世でおまえに長い命を与えたのではないのだから」この言葉はユダに対する主の言葉でもある。「待つことが出来ない性格」の臼井はこれを神のことばと聞く。そこに美少年である望月路加が現われ臼井と交渉が始まるのだが、路加少年はロンドンから帰って来たばかりのバイリンガルであるが、これが小学校五年生とは思えぬ日本語を使う。臼井は小説家であり、現在三十九歳、キーツ、イエーツ、そしてエリオットの詩を愛誦するキリスト教徒である。その臼井と会話を交わし、全く澁みがない。不自然と云えば不自然である。十八歳くらいならまだしも、路加少年は十一歳である。路加が十八歳とするとこの小説の根幹である少年愛が成立しなくなる。

臼井には美枝という美しい妻と、最近益々自分に似てきた一歳四ヶ

月の娘麻利枝がいる。その臼井が小説の冒頭で信仰宣言を唱え、主の祈り、そして天使祝詞まで唱える。正にミサの再現である。これから、大変なことが起こるといふ予言をしているようなものである。しかも臼井が少年愛に何故走らなければならないのかという必然性が全く分らない。所で『谷川の水を求めて』における森内の〈地獄〉とは何であろうか。普通なら幻聴と思われる予言を臼井は幻聴ではなく、自分だけに聞こえた予言として受け取り、「わたしはこの世でお前に長い命を与えたのではないのだから」を文字通り、「すぐ一年以内に死ぬ」と解釈し、ピアニスト望月札子にも〈リベラ・メ〉〈われらを解き放ち給え〉と走り書きさせている。つまり、幻聴を神の予言と取ったことだ。臼井は幻聴と神の予言とを混同させているようだ。大体祈ることができない者に、神の予言があるものかどうかはなほ疑問である。森内はそれを狙ったか。臼井基典は自分でも予感していた通り、己の喘息と薬物中毒で死に、望月留加はオートバイで東京から追いかけてきた身長一八〇糎、二十四五歳の男で金の大きなイヤリングをし、「意図的に抜歯した」と思われる口をして、病的な笑い方の変質者に凌辱されて死んだ。

森内はここで臼井に何重もの仕掛を施し、どんなことがあっても悪いのは臼井であり、少年留加には罪が無いように配慮している。しかし、やはりなんと云っても悲惨なのは路加であり、臼井がいつか立ち寄った新宿のSEXSHOPの受付に座っていた青年、つまり「生きたまま、その若さで文字通り朽ちて行くにまかせている」ように、白

井の性の奴隷になって了うかも知れぬ路加の身の上である。そうすると白井の地獄というよりも、「世の中の事、音楽のほか、何も知らぬ路加の（地獄）」といった方が良いかも知れない。白井に発見されたことによって「何も知らぬ」路加は（地獄）を彷徨うことになったといつてよい。

白井は路加との愛欲による瀆聖の行為もその自覚によって神を招いているのだという思いがあった。それは牽強附会、自己弁護ではなかった。白井が瀆聖、背徳の意識を抱く限り、神は彼を離れ見捨て給うことはないであろう。あるいはこうも言える。神は十字架の上でイエスを沈黙のうちに見捨てたように、白井も彼自身十字架の上でイエスを見捨てていた。（『谷川の水を求めて』）

私に云わせれば、確かに神はイエスを見捨てた。エリ、エリ、ラマ、サバクタニ、これは否定しようがない。しかし、イエスは復活した。白井はどうか。白井に最初から復活する意志がないとしたら、路加少年の魂は永遠に宙を彷徨することににならないか。『谷川の水を求めて』は森内の野心作のつもりであったと書いたのであるが、恐らく「少年愛」を描いて世の傑作たらしめたと思われるのであるが、そこにどうしても作家の恣意的なものを見て了うのである。

森内の最後の長篇は『晒し井』である。この小説の眼目はなんとといっても郡山勉の（復活）であろう。遠藤周作が生前日本人にとって最も

分りにくいのは肉体の（復活）であるという観念であると云い、全ての日本人に分る（復活）概念を彼の小説群に示して見せたのであるが、十分とは言えなかったように思うのである。その（復活）を扱った作品であるという（地獄）よりも寧ろ（天国）を現わす作品となるのだが、『晒し井』の（地獄）とは一体何なのであろうか。私は『晒し井』の（地獄）はその（古い）にあると思う。（古い）に限定して見ると郡山勉の度重なる行方不明も理解出来るし、その（地獄）も納得できるのではないか。そしてもう一人の人間、煙草屋沼崎友敏の孤独も地獄であるが、彼の場合、孤独は（古い）に繋がるだろう。

郡山勉は「希代社」の社長である。希代社は絵本（三歳〜七・八歳）を取り扱う出版社で、社員は五名の構成から成っている。即ち、社長は郡山勉、妻清美、娘きよ、鳥越進介、ジム・オドリスコールの五名で重版五十点を出版する中堅の会社であった。一つ、際立っているのは会社の全員がキリスト教徒であるということであろう。

『孤独』にしろ（古い）にしろ、若さを抜きにしては考えられない。ある意味では『谷川の水を求めて』における主人公白井の問題も、四十歳を目前にした（古い）の問題とも考えられるのである。しかしである。語り手は誰かという問題に移して調べて見ると意外なことが分ってくる。つまり『晒し井』の語り手は一人であるとすると作者の分身であり、複数であるとする単純に云っても、二人の神父、郡山と妻清美、ジム、進介と続き驚くべきことに煙草屋沼崎も入っている。これはエンターテインメントの手法ならば許されるが純文学では普通取

らない。

『晒し井』の語り手達に共通項はあるのか。それはクリスチャンということになるか。ここで問題になるのは沼崎の存在であるが、彼は清美に惹かれて教会に顔を出す。このときシスターの「ミサをうけるだけがキリスト教徒ではありません」という声<sup>2</sup>が聞こえてくるのだが。このシスターの声をどのように解釈するか。つまり、日曜日毎にミサを受けにくる人だけがキリスト教徒ではない、ということか、あるいは日曜日毎にミサを受けにくる人でも、「偽クリスチャンが居ますよ」ということか。それにしても煙草屋沼崎は清美に惹かれて教会にまで行った。それをキリスト教徒として認めるか。もしも、清美がマリアであったらと想定しても、私としてはやはり認めがたいのである。これは、聖書については理解度が非常に高い。しかし、洗礼も受けず教会活動もしていない人をクリスチャンと認めるか、ということに似ているようだ。沼崎がキリスト教徒でないと語り手は一人であり作者森内の分身ということになる。

もう一つ問題がある。それは死んだ進介、あるいはもう一人の社員であるジム・オドリスコール、この二人の若者の青春はどうなっているのか。同じ宿泊所にきよという美しい女性がいるのに、彼女に対する思いは全く描かれていない。きよの母親が十分若く、マリアを想わせるとしても、不自然である。

## 結 び

小説にたいする考え方も変わった。光がおよんでいるがゆえに、即ち影がある。よって光を描くために、私はもっぱら、その影の世界を書いてきた。ところがいまは、率直に光を仰いで書きたい。太陽と死は、直視できないと言うが、私はこのもつともらしく、いかがわしい箴言を好まない。

これは『朝日新聞』平成十二年二月一日の夕刊の森内のエッセイである。森内はこのエッセイでも述べているように、確かに影の部分を強調して書いてきたように思う。だからこそ、この論の題も「森内俊雄と地獄の思想」なのであるが、この『晒し井』を読む限り、十分成り立っているとは思えない。それは作者も書いていることだが、進介に良寛の書の評をさせている部分で、進介は良寛の「今日食を乞うて雨に逢った」という文章を読み「稲光のようなものに打たれた思ひがした。何十億光年もの宇宙の果ての凍りつくような良寛の孤独への認識を知った」という部分があるが、これに比べれば、煙草屋沼崎の孤独はまだまだ甘いと言わざるを得ないのである。その沼崎が清美を追って教会に一度顔を出しただけでクリスチャンとは到底認められないと云うのが私の意見である。

長崎にて、「鳥越進介の楽園に、きよが遊んでいる。」きよと進介の関係は、まるで子供の遊びのようである。大人の匂いがしない。その進介がきよの父と五年間付き合った後二十九歳で結核で死んだ。ジムは進介と同年代の二十九歳であるが、彼の見立てでは、郡山勉（きよの父）はワグナーのタンホイザーである。とすると郡山勉をよみがえらせるためにエリザベートの犠牲がいる。エリザベートは清美かきよか。そしてエリザベートの遺体の前で息を引きとるタンホイザーとなると、一体誰がタンホイザーなのか。

進介が死んでこの世にいない以上、ジムがタンホイザーということも考えられる。ジムも後半へんなせきをするようになり、結核で死ぬ可能性もある。だが清美、きよの二人とも死なない。とするとこの物語をタンホイザーに意味づけすること自体不合理であることも考えられる。

それよりも、煙草屋沼崎がキリスト教信者として認められるとなること、また作者森内がエッセイに書いたように、今後は「光の部分」を強調したいとするなら、森内の文学は正に護教文学と呼ばれても仕方が無いのではなからうか。そうなると、本当に狭い一部のクリスチャン愛好の文学に成り下がって了うのではないか。そういう危惧を感じるのである。たとい森内がそのように望んだとしても、残念であると感じるのは私一人ではあるまい。

以上ざっと森内文学をデビュー時から最近の最後の長篇まで俯瞰したのであるが、まだまだ森内は書くであろうし、『晒し井』では今まで

とかなり、思想的に違う印象を受けるのである。彼はこのあと、一九九九年、『短篇歳時記』という、俳句一〇〇題に各々短かい文章を付けた短篇集というよりも、掌篇集を出したのであるが、これについては後述したい。

### 〈注〉

(1) 「森内俊雄と地獄の思想―上―」は『キリスト教文学研究』二〇

〇〇年 第一七号参照。

(2) 『晒し井』



## Toshio Moriuchi and His Thinking About Hell (II)

Hiroyuki NISHITANI

Toshio Moriuchi and His Thinking About Hell (I) was published in *The Review of Studies in Christianity and Literature* (Volume XVII, 2000). This paper is the second part. Moriuchi's thinking about hell is realistic at first but it gradually became nihilistic. What does this mean?

Toshio Moriuchi is a Roman Catholic Christian. I deal with his three books. His last novel, *Sarashi I.* is very important. The title means a water well drenched in the sun. I deal with the relationship between Moriuchi's literature and God.

---

**Key words;** Hell, Tomotoshi NUMAZAKI, Love, Tsutomu KÔRIYAMA, Loneliness.